OMC News 大阪ムービーサークル

OMC事務局　〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原一夫　TEL06-6833-9227
広報編集局　〒573-1171 枚方市三栗1-18-20　前田茂夫　TEL072-850-5781
http://www6.ocn.ne.jp/~nakabc/omc-news/kaiho.htm

平成２５年４月（2013年）No.５６８

第24回丹波篠山ビデオ大賞（全国ビデオコンテスト）
昨年の前田氏に続き今年は黒田氏がグランプリ
「家族で受け継ぐ無形文化財」８分の再構成作品

少々お知らせが遅くなりましたが、丹波篠山ビデオ大賞に黒田敏彦会員がグランプリを受賞されたことを皆様に報告し、改めて「おめでとうございます」とお祝い申し上げます。昨年は前田氏が「炎に挑む」で同じくグランプリを受賞なさっているので、２年連続の快挙となりました、丹波篠山の全国コンテストは大変レベルが高くノミネートされるのが難しいのですが、「生きる」という主催者のコンセプトにうまくマッチしていたのでしょう。それにしても２４年度ＯＭＣ年度特別大賞受賞作でもあり作品レベルからいっても、グランプリ受賞は期待されて十分な作品だったと思います。本編は１９分ですが、応募作は規定により８分に縮められたものです。この８分の作品は４月２９日（祭日）ＯＶＣビデオフェスティバルで上映されますので、会場の大阪市立中央会館へどうぞ。13時からです。

第47回全国ビデオ映像コンテスト募集案内くる

東京アマチュア映像連盟主催、日本アマチュア映像作家連盟後援の「全国ビデオ映像コンテスト」の募集がはじまっています。腕試しに応募してみませんか。

募集要項：テーマ自由、ただし他のコンテストに受賞したものは不可
- **作品の長さ：一般部門　１０分以内**
  チャレンジ部門　５分以内（１回のみ応募）
- **参加量　２千円　・応募締切６月２０日（必着の事）**
- **応募用紙**　会長宛申し出てください。

４月例会のお知らせ

４月例会は第４土曜27日18時より、いつもの難波市民学習センター（ＪＲ難波ＯＣＡＴビル４階）にて開催します。撮影会に参加される方は最終確認のお知らせがあるかも知れません。その他の会員諸氏もどうぞお越し下さい。皆様にお会いするのが楽しみです。

ＯＶＣビデオフェスティバル

４月２９日（祭日）13時より

恒例の大阪ビデオクラブのＯＶＣビデオフェスティバルは、４月２９日（月曜祭日）大阪市立中央会館で開催されます。OMC会員さんの作品も多く出品、どうぞお出かけください。

３月例会レポート

元ＯＭＣ会員で健康上の理由から辞められた増池 茂氏が、ひょっこりお顔を見せられお元気そうで安心しました。宮井元世話役が辞められ書記役に欠員が出来て困っていましたが、今月から高瀬辰雄氏が書記役を引受けて頂くことになりました。新しい視点からの講評に期待しています。

今月の司会は進藤氏、書記、高瀬氏、上映担当、井上、河合の両氏、録画、江村氏、受付兼照明係は宮崎、森口の両氏で進行。

■出席者：有村、井上、江村、岡本、上総、紙本、河合、黒田、合原、進藤、関、高瀬、鉄具、西村、華岡、前田、宮崎、森口、森下、森田、山本、渡辺の 22 氏と見学増池氏

■上映（今月の講評は高瀬世話役です）

１．雪の日　余部（ＨＤＶ）

前田茂夫さん　　８分４７秒

雪の香住駅を出る列車。車窓の雪景色が途切れ、トンネルを抜けると、余部の海と町が眼下に広がる。列車は新しく架け替えられたコンクリート製の橋梁を渡っていく。そして以前の鉄橋の橋脚を３本残し、その上に造られる展望台で働く人たちを雪の中に追います。海岸の風景に変わり、雪の積もった船や防波堤に打ち寄せる荒波、霞む岸壁などを詩情豊かに描写。雪が激しくなる中、波打ち際からのアングルで橋梁を渡る列車を捉え、「鉄橋がなくなっても厳寒の余部は私の心に残る風景である」とテロップが入ります。これこそ映像を通じて作者の伝えたかったものではないでしょうか。この作者の思いがこもったラストシーンは非常に印象的でした。

２．ゴゾ島（ＢＤ）

華岡　汪さん　　１０分３９秒

地中海のヘソと呼ばれるマルタ共和国のゴゾ島。ゴゾ島はマルタ本島から西へ６キロの沖合に浮かぶ島と…位置関係を記した地図で紹介。フェリーでイムジャール港に着くと、バスで観光。海の浸食で出来た巨大な岩のアーチ、アズールウィンドーの景観。島の中心地、ヴィクトリアのチタデル要塞や大聖堂、高台からの街や海の美しい展望のカットが続く。ヴィクトリアの街では細い路地や憩う人々などをテンポ良く描かれています。そしてホメロスの叙事詩に登場するカリプソの洞窟、巨石のジャガンディーヤ神殿、ラブラ湾の美しい砂浜など島の景観を満喫させられた作品でした。ただ海沿いや高台での現録は風の音が時折、強く入っているのが気になります。

３．今年も小鳥がやって来た（ＢＤ）

鉄具嘉夫さん　　４分５０秒

電柱に無数の鳥がとまっている。１月末、毎年この時期になると、作者の家の庭に多くの野鳥がやってきます。お目当ては庭のヒラカンサの赤い実。ヒラカンサはバラ科の木で実は野鳥の大好物。鳥たちは一斉にその実に群がり、食べ始める。かなりアップの映像だが、結構、人が近づいても鳥は逃げようとしません。しかも鳥同士での諍いもなく、食べるのに一生懸命。１月 31 日朝から始まり、２月１日午後５時には実はすっかり食べられてしまっている。鳥の知識が乏しいので、ムクドリ、メジロ（？これも怪しいが）くらいしかわかりません。出来れば鳥の名前を入れていただければ…もっと楽しめたかと思います。

４．琵琶湖湖北の冬鳥たち（ＢＤ）

進藤信男さん　　９分５０秒

冬になると越冬のため琵琶湖にやって来る冬鳥を 2010 年から撮り続け、作品としてまとめられたもの。トップシーンは山に向かって、カメラマンが一斉に被写体を捉えている。そのカメラの先にはオオワシが鎮座。オオワシは国の天然記念物で絶滅危惧種に指定されている。映像に収めることも難しいのではないでしょうか。さらに作者は粘って飛び立つシーンも撮影。作品はオオワシをはじめオオヒシクイ、コハクチョウを追い、前半は静かに描かれているが、灯台にオオワシが飛来すると、鳥たちが一斉に飛び立つドラマチックな場面に変わる。そして再び静かなシーンに戻り、鳥たちの北への帰行の準備が始まるとナレーシ

ョンが入り、夕焼けの空に飛び立つ冬鳥の姿を描いて終わります。冬鳥の飛翔する美しい映像が印象的でした。

５．菜の花の咲く町（ＢＤ）

有村　博さん　　５分４３秒

作者の自宅から近鉄八戸ノ里駅までの道のいたる所に黄色の菜の花が咲き乱れている。道すがら菜の花の風景をスケッチ風に描かれています。この町に菜の花が多いのは、菜の花をこよなく愛した文豪、司馬遼太郎さんが長年、住んでいて、命日の２月12 日を菜の花忌として、文豪を偲ぶ活動が広がっているからです。「生前、駅に向かって司馬さんご夫妻が歩かれている姿を数回見かけたことがあります」というナレーションが菜の花のカットと重なり映像に趣を与えています。「八戸ノ里は毎年、菜の花の咲く素敵な街です」と結ばれているが、菜の花の風景を描かれた素敵な作品でもあります。これがリーズナブルなデジタルカメラの動画で撮られたことには驚きです。

６．晩秋の竹田（ＢＤ）

江村一郎さん　　６分１０秒

霧に浮かぶ竹田城。トップシーンはまさに作者ならではの秀逸な映像。さらに晩秋の竹田城のカットが続き、一転、駅に入る列車の風景。そして通学の子供たちや道行く老人、畑仕事にいそしむ女性や川掃除の男性と、何気ない風景に晩秋の想いを重ねるカットが続きます。そして川を流れる落ち葉、石仏、老婆、枯れ葉のアップ、朽ちかけた土塀、列車の前を横切る黒猫など動くものに絞ったという印象的なカットが連なっていきます。晩秋そのものではないカットもあります。しかし、それらはいずれも作者自身が晩秋というイメージとしてとらえられたものなのでしょう。そうしたカットの選択と繋ぎは大変難しいが、いつもそれに取組まれる映像編集が江村さんの作品の大きな魅力となっているのではないでしょうか。

７．むぎや祭り（ＢＤ）

紙本　勝さん　　９分００秒

越中の小京都、南砺市城端のむぎや祭り。城端の街並みのカットに重ね「むぎや節は平家一門の落人がこの地に安住の地を得て、弓を持つ手を鍬に持ち替え、歌い始めた」と、女性のナレーションで説明。素朴でもの悲しい調べに乗せて、伝統芸能会館の舞台では踊りが始まる。小さな子供や女性、凛々しい男性の踊りに踊り手のアップなどを挿入し、テンポよく編集されています。踊りの舞台は浄念寺や善徳寺と野外に変わる。「哀調を帯びた唄と踊りは平家の落人を偲ぶ響きを持っていました」と、踊りの余韻を残して終わります。「むぎや祭り」は踊りが主体のようで、作品は大半が踊りのシーンでした。

８．新フェスティバルホール　ウォークスルー（ＢＤ）

井上勝彦さん　　８分４３秒

4 月 10 日のこけら落しを前に新フェスティバルホールを作者は3 月 8 日に見学。GoPro のウェアラブルカメラの新モデル Hero 3 で３Ｄ撮影されています。トップシーンの真紅のカーペットが敷かれた大階段の映像はこれまで見たことのない広がりをもち、驚かされる。超広角のスムーズな移動撮影で旧ホールの面影を残す 1 階正面ロビーのシャンデリアや真紅のカーペット、３階吹き抜けのＬＥＤ照明の星空などを描写。さらに観客席を舞台から撮影、舞台裏や２階席、３階席と見学者とともに移動し、新装のホールを超ワイド画面で隈なく見せる。ウェアラブルカメラの特徴を如何なく発揮された作品です。ウェアラブルカメラはアクティブな新たな映像表現を生み出すツールとして、世界中で脚光を浴びているといわれます。次はどのような超ワイドな映像を見せていただけるか楽しみです。

９．ワットシャロンの春祭り（ＳＳＤ）

森田光春さん　　８分４０秒

タイのプーケット島の最大の仏教寺院ワットシャロンの春祭りを撮影されています。赤い屋根や金色に彩られた大きな寺院。大勢の人がお参りに訪れている。年に一度の祭りには露店が並び、遊園地のアトラクションから嬌声が響く。夜になると、参拝者も増え、ローソクの灯や屋台の電燈が灯り、ＢＧＭもアップテンポで雰囲気を盛り上げています。雰囲気は伝わる映像ですが、ナレーションやテロップでの説明があれば、もう少し祭りの内容が分かりやすいかと思います。

なお作品はＰＲ 422 8 Bit(1920 × 1080) 60 Ｐの映像をブラックマジックデザインのストレージデバイスＳＳＤレコーダに録画されたものを映写。ＳＳＤはＨＤＤに比べ耐久性に優れ、薄型で軽量であることなどから注目されてきています。

１０．飲めや、はす酒（ＢＤ）

森口吉正さん　　８分１０秒

花の寺として知られる京都宇治の三室戸寺。7 月上旬、あじさいが終わり、はすの季節に移っている。本堂前では、はすの葉に酒を注いで飲む集いが行なわれている。はすの葉の杯は象鼻杯といわれ、健康、長寿の祈願とされるそうです。寺には 100 種以上のはすの花があるといわれ、咲き始めた花のアップを交え、酒を飲む人のユーモラスな表情を捉えられています。おかわりする人、力余って茎を折る人、はすの花のように赤ら顔になっている人…軽快なＢＧＭで、はす酒の集いの楽しい様子が画面にあふれています。「雨が落ちてくるが、お構いなし。はす酒飲んだら、それこそ極楽極楽」のナレーション。心が和む作品でした。

１１．洛楽人工房（ＢＤ）

高瀬辰雄さん　　０分００秒

呉服の販売方法は多彩で、店頭小売、展示会販売、訪問販売、ネット販売といろいろあります。その中で地方の小売店が馴染みの顧客を募って、京都の問屋を訪れ、産地直販のような形で販売する方法があります。これは呉服製造問屋「洛楽人工房」が小売店にお客を募って、連れてきてもらうための工房紹介ビデオで、同工房に頼まれて製作したものです。内容が一般の消費者対象でないので、画やナレーション（社長の娘さん）が少し分かりにくかったかも知れません。

１２．コレヒドール島（ＢＤ）

山本正夢さん　　８分４０秒

フィリピンのオタマジャクシに似た小さな島、コレヒドール島。その島は第二次世界大戦の過酷な歴史を秘めています。作者は一度ツアー観光で訪れたが、とても撮影し切れなかったということで、再度、個人で行き、戦闘の傷跡などを克明にたどられています。日本軍基地には弾薬庫、錆びついた砲台、重機関銃、中央トンネルの中には手榴弾の爆風跡、掘削ドリル、ベッド跡などが生々しく残っている。アジア一長い兵舎や病院跡などアメリカ軍の建物と思われる残骸もそのまま。戦後 60 数年経ったが、戦闘の跡は消えることなく、今も残されている。作品はこうした戦争の悲惨な歴史の風景とは対照的なギャリー砲台を背景に海に沈む美しい夕日を描いて終わります。遠い小さな島の貴重な映像を見せていただきました。

１３．舞台袖（ＤＶ）

上総修一郎さん　　９分５０秒

2000 年 11 月 3 日、桜橋サンケイホールでの藤間良太郎の会。京鹿子娘道成寺の開演前の舞台袖、本番を前にして囃子の音合わせや照明の打ち合わせなど、緊迫した場面が続く。幕が開き、白拍子花子を演じる藤間良可寿さんが舞台に上がる。カメラはめったに見ることの出来ない舞台袖からの踊りの所作を追います。そして再び舞台袖に下ると着替えや小道具の付け替えなど狭い場所で多くの人があわただしく動く。舞台袖で照明も乏しい中、これらの様子をつぶさに撮影されています。「舞台袖」というタイトルはほかに浮かばないほどのぴったりの作品です。そして清姫が鐘に乗る最後の場面は舞台の前方からの映像に変わり、幕が下り、ここで作品も終わりますが、踊りが終わった後の舞台袖の様子はどのような感じなのか、気になりました。

[参考作品]

二人三脚の移動販売車（ＢＤ）

内田一夫さん（川越市）　１７分００秒

東京ビデオフェスティバル 2013 ビデオ大賞受賞作品。群馬県南牧村という限界集落で、28 年間、食品の移動販売を続けている安藤裕さん夫妻の日常を描いた川越市の内田一夫さんの作品。夜明け前から商売の支度をし、トラックで村に行き食品を販売する二人の姿をさりげないカメラワークで描いていきます。買い物にやって来る村の高齢者の撮影やインタビューも誰一人構えたところがなく、自然です。気負いやドラマチックな展開はありません。作者も撮影しながら、安藤夫妻や村の人たちと溶け合っているような静かな感動を覚える作品でした。